

6 3 6 1 - 7 5 5
平成 2 0 年 8 月 2 5 日

各関係機関の長
各病虫害防除員 殿

宮崎県病虫害防除・肥料検査センター所長

平成 2 0 年度病虫害発生予報第 5 号について

平成 2 0 年度病虫害発生予報第 5 号を発表したので送付します。

平成 2 0 年度病虫害発生予報第 5 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

発生予報の概要

作物名	病虫害名	発生量の 平年比	本文での 記載ページ
普通期水稲	穂いもち	やや多	2
	紋枯病	やや多	2
	ごま葉枯病	並	2
	トビイロウンカ	並	2
	斑点米カメムシ類	並	2
大豆及び野菜 類全般	ハスモンヨトウ等のチョウ目（鱗翅 目）害虫	並	3
施設果菜類	ウイルス媒介虫 (アブラムシ類、アザミウマ類、コナジラミ類)		3
	タバココナジラミ類		3
促成イチゴ	炭疽病等		4
果樹全般	果樹カメムシ類		4
カンキツ	黒点病	やや多	4
	かいよう病	並	4
	ミカンハダニ	やや多	4
	チャノキイロアザミウマ	並	5
チャ	炭疽病	並	5
	もち病	並	5
	輪斑病	並	5
	チャノコカクモンハマキ	並	5
	チャハマキ	並	6
	カンザワハダニ	やや多	6
	チャノキイロアザミウマ	やや多	6
	チャノミドリヒメヨコバイ	やや多	6
	クワシロカイガラムシ	並	6

作物の生育状況（8月中旬）

普通期水稲は幼穂伸長期～穂ばらみ期、大豆は栄養成長期、温州みかんは果実肥大期、茶は3番茶の摘採前後であった。

向こう1か月の気象予報

気温は平年並または高い確率ともに40%、降水量・日照時間は平年並の確率40%と予想されている。（1か月予報 鹿児島地方気象台 8 / 2 2 発表）

発生予報の根拠および防除対策

普通期水稻

1 穂いもち（やや多）

[予報の根拠]

- (1) 8月中旬の葉いもちの発生面積率35.8%（平年37.0%）は平年並、発病株率15.3%（平年10.8%）は平年よりやや多である。
- (2) 本年は移植時期が平年よりやや遅かったことから、出穂時期は8月下旬～9月上旬にずれ込むと見込まれ、感染に好適な状況になると考えられる。

[防除上の注意]

- (1) 特に東北地域における葉いもちの発生状況は、発生面積率66.7%、発病株率31.6%と高い状況であるので注意する。
- (2) 出穂期に、夕立など短時間でも降雨があると、発生が増えるおそれがあるので注意する。
- (3) 葉いもちの発病程度が高いほ場では、収穫前使用日数等に注意して穂揃期に防除する。

2 紋枯病（やや多）

[予報の根拠]

- (1) 8月中旬の発生面積率42.9%（平年41.4%）、発病株率5.5%（平年8.2%）はいずれも平年並である。
- (2) 向こう1か月の気候は、気温は平年並～やや高く、降水量は平年並と予想されており、本病の進展に好適であると考えられる。

[防除上の注意]

- (1) 穂ばらみ期以降はイネの抵抗性が弱まり、高温多湿条件下では上位葉鞘へ進展しやすいので、発病程度が高いほ場では、収穫前日数に注意して防除する。

3 ごま葉枯病（並）

[予報の根拠]

- (1) 8月中旬の発生面積率7.1%（平年5.4%）、発病度0.2（平年0.5）はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 出穂後の本病の発生は穂枯れの原因になるので、発生の多いほ場では穂揃い期後に防除する。

4 トビイロウンカ（並）

[予報の根拠]

- (1) 8月中旬の巡回調査では発生未確認である。
（平年値は、発生面積率14.0%、株当たり虫数0.02頭）

[防除上の注意]

- (1) 成虫・幼虫ともに株元に生息しているので、防除の必要があるときは株元まで薬剤が十分到達するようにする。（要防除密度は短翅型雌成虫が株当たり0.2頭）

5 斑点米カメムシ類（並）

[予報の根拠]

- (1) 8月中旬の発生面積率14.3%（平年12.6%）、20回振り虫数0.2頭（平年0.3頭）はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 本虫による被害は品質を低下させ、等級格下げの主要因になるので、穂揃期とその7～10日後に防除するが、残存虫が多い場合は収穫前使用日数等に注意して追加防除する。

大豆及び野菜類

1 ハスモンヨトウ等のチョウ目害虫 (並)

[予報の根拠]

- (1) 8月中旬の大豆におけるハスモンヨトウの発生面積率80.0% (平年74.5%) は平年並である。
- (2) 8月中旬のサツマイモにおける、ハスモンヨトウ・ナカジロシタバ等チョウ目害虫の発生面積率78.5% (平年83.7%)、食害面積率8.8% (平年14.1%) はいずれも平年並である。
- (3) 県内3カ所 (国富、西都、都城) に設置したフェロモントラップでは、8月上旬に誘殺数がやや高まったが、平年並で推移している。

[防除上の注意]

- (1) 早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を徹底する。

施設果菜類

1 ウイルス媒介虫 (アブラムシ類、アザミウマ類、コナジラミ類)

[防除上の注意]

- (1) ウイルス病の多くは害虫によって媒介され、特に生育初期に感染するほど被害が大きくなる。育苗時から媒介虫の防除を徹底し、ウイルスの感染防止と苗による本圃への害虫の持ち込み防止を図る。また栽培に当っては防虫ネットや近紫外線カットフィルムを張り、ウイルス媒介虫の侵入を防止するとともに、害虫の生息場所となる周辺雑草の除去を行う。
- (2) 育苗ハウスに黄色・青色粘着板を設置し、密度低下に努めるとともに、媒介虫の発生が確認された場合は、すぐに殺虫剤の散布を行い徹底的に駆除する。

<虫媒伝染する主なウイルス病>

媒介虫	病原ウイルス	主な感染作物
タバココナジラミ類 (シルバーリーフコナジラミ、タバココナジラミ バイオタイプQ)	TYLCV	トマト・ミニトマト、トルコギキョウ
	CCYV (仮称)	メロン・キュウリ
アザミウマ類	TSWV	ピーマン・トマト・キク
ミナミキイロアザミウマ	MYSV	キュウリ・メロン
アブラムシ類	CMV、ZYMV PRSV	キュウリ・メロン・ニガウリ

2 タバココナジラミ類 (シルバーリーフコナジラミ、タバココナジラミ バイオタイプQ)

[防除上の注意]

- (1) 最近、多くの品目において、各種薬剤に対して感受性の低いタバココナジラミ バイオタイプQが発生していることが確認されており、薬剤のみによる防除は困難であるので、防虫ネットや黄色粘着板等を組み合わせた総合的な防除対策を講じる。
- (2) タバココナジラミ類は多くの植物に寄生し、増殖するので、育苗・栽培施設内外の除草を徹底するとともに栽培目的以外の作物や観葉植物等を持ち込まない。

促成イチゴ

1 炭疽病

[防除上の注意]

- (1) 罹病苗の持ち込みは本ほ内での感染源となるため、健全苗の定植に努める。
苗床で発病した苗については、その周囲の苗も感染苗と見なし、対処する必要がある。(発病苗及びその隣接苗は廃棄するのが望ましい。)
- (2) 定植後に発病した株は、早期に除去しビニール袋に密封するなど病原菌の拡大防止に努める。

2 その他の病害虫

[防除上の注意]

- (1) 近年、苗からの持ち込みによる「うどんこ病」や「ハダニ類」の発生が多く、定植初期に病害虫の発生が多い状況が見られるので、定植前に防除を徹底し、本ほに病害虫を持ち込まないように注意する。

果樹全般

1 果樹カメムシ類 (-)

[防除上の注意]

- (1) 果樹カメムシ類は園外から飛来し、地域や時期によって発生量が大きく変動するので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努める。
- (2) うんしゅうみかんでは、色ぬけから着色始め頃の加害は落果を生じやすく、特に注意が必要である。
- (3) 県内各地から採取したヒノキ毬果の調査(7 月下旬) では、昨年同時期より口針鞘数が少なく、果樹園への飛来は昨年より遅いと考えられる。

カンキツ

1 黒点病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 8 月中旬の果実での発生面積率 55.0% (平年 35.3%) は平年よりやや多、発病果率 21.9% (平年 8.9%) は平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 感染源となる枯れ枝は、可能な限り取り除き園外に持ち出して適切に処分する。
- (2) 雨が多いと多発する恐れがあるので、積算降水量 300mm 毎又は 1 か月おきに防除する。

2 かいよう病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 8 月中旬の果実での発生面積率 20.0% (平年 13.5%)、発病果率 1.4% (平年 0.9%) はいずれも平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 発病した枝葉は、伝染源となるので可能な限り取り除き、園外に持ち出して適切に処理する。
- (2) 風雨による枝葉の損傷を少なくするため防風垣を整備する。特に台風の襲来が予想される時は事前に防除を行う。

3 ミカンハダニ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 8 月中旬の発生面積率 60.0% (平年 43.9%)、寄生葉率 18.0% (平年 10.4%) は

いずれも平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 生息密度が高くなると防除が困難になるので、寄生葉率30% (1葉当たり雌成虫数0.5~1頭) を目安に防除を行う。

4 チャノキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

- (1) 8月中旬の巡回調査では発生未確認である。

[防除上の注意]

- (1) 果実に寄生すると収穫果実の外観を損なうので、10果当たり虫数3頭を目安に増殖初期に防除する。

チャ

1 炭疽病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 8月中旬の発生面積率64.7% (平年55.6%) は平年並、 m^2 当り病葉数2.5葉 (平年6.3葉) は平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- (1) 秋芽は生育期間が長く感染の機会も多いため、開葉期に予防効果の高い薬剤を散布し、その10日~14日後に治療効果の高い薬剤を散布し防除する。

2 もち病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 8月中旬の巡回調査では発生未確認である。

[防除上の注意]

- (1) 秋芽の生育期に雨が多いと感染しやすい。特に中山間地域では発生が多いので秋芽の生育期に防除する。

3 輪斑病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 8月中旬の発生面積率23.5% (平年17.6%) は平年並、 m^2 当り病葉数0.4葉 (平年0.7葉) は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 萌芽から開葉期にかけて、包葉などが取れたときにできる傷口から輪斑病菌が感染すると新梢枯死症が発生するので、輪斑病の発生ほ場では秋芽の萌芽期~2葉期に防除する。特に発生が多いほ場では5~7日間隔で2回防除する。

4 チャノコカクモンハマキ (並)

[予報の根拠]

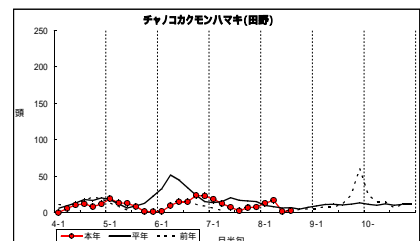
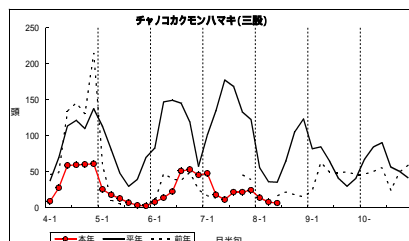
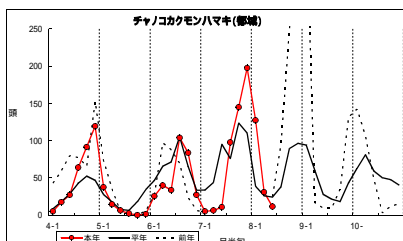
- (1) 8月中旬の巡回調査では発生未確認である。

(平年値は、発生面積率1.6%、 m^2 当り巻葉数0.04葉)

[防除上の注意]

- (1) フェロモントラップ調査による発蛾最盛期は、都城市、三股町では7月第6半旬、宮崎市(田野町)では8月第2半旬であった。次の発蛾最盛期は、9月上旬と予想される。

- (2) 防除適期は、発蛾最盛日から7~10日後である。



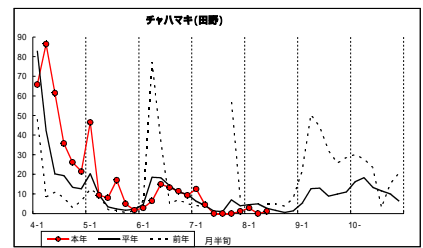
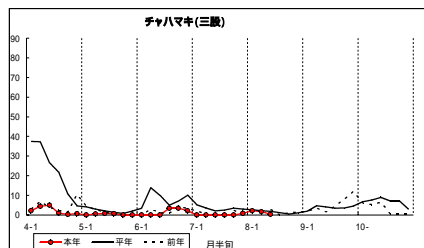
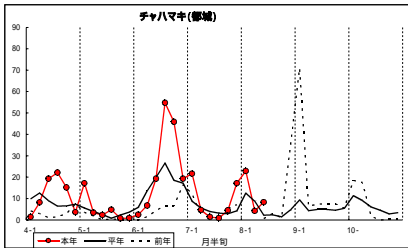
5 チャハマキ (並)

[予報の根拠]

- (1) 8月中旬の巡回調査では発生未確認である。
(平年値は、発生面積率2.6%、m²当り巻葉数0.07葉)

[防除上の注意]

- (1) フェロモントラップ調査による発蛾最盛期は、宮崎市(田野町)、都城市、三股町とも8月第1半旬であった。次の発蛾最盛期は、9月上旬と予想される。
(2) 通常チャノコカクモンハマキと同時に防除できるが、両種の発蛾最盛期が10日以上異なる場合は別に防除する。



6 カンザワハダニ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 8月中旬の発生面積率52.9% (平年23.1%) は平年より多、寄生葉率3.4% (平年2.0%) は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 同系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤の口 - テ - ション散布を実施する。

7 チャノキイロアザミウマ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 8月中旬の発生面積率70.6% (平年49.6%) は平年よりやや多、寄生葉率4.9% (平年5.2%) は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) この時期は卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくく防除効果があがらないので、残効性の長い薬剤が1週間間隔での連続散布を行う。

8 チャノミドリヒメヨコバイ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 8月中旬の発生面積率58.8% (平年36.2%)、寄生葉率4.2% (平年2.0%) はいずれも平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) チャノキイロアザミウマとの同時防除とする。

9 クワシロカイガラムシ (並)

[予報の根拠]

- (1) 8月中旬の発生面積率41.2% (平年23.7%)、寄生株率14.1% (平年9.9%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 防除適期は幼虫ふ化開始から1週間後、または幼虫ふ化最盛期なので、ふ化状況をよく観察して防除する。
(2) 薬剤散布は、枝幹に十分かかるようにていねいに散布する。

農薬散布時のドリフト対策について

- 1 ポジティブリスト制度の施行に伴い、農薬の使用については今まで以上に厳重な注意を払うことが必要です。
- 2 風の弱いときに、ノズルや散布方向、噴霧圧力などに注意して、適正な農薬散布を心がけましょう。
- 3 地域でよく話し合い、農薬の使用時期や農産物の栽培内容などを十分調整しましょう。
- 4 農薬の散布について疑問点がありましたら、病害虫防除・肥料検査センターもしくは最寄りの農業改良普及センターへお問い合わせください。

その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。
日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>
農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>
- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。特に水質汚濁性農薬ベンゾエピン剤（商品名、マリックス乳剤、粒剤等）は使用しないこと。
- 3 発生量（程度）の区分

多い	（高い）	やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多い	（やや高い）	平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並		平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少ない	（やや低い）	平年並の外側20%の度数の入る幅
少ない	（低い）	やや少ないの外側10%の度数の入る幅 （平年値は過去10年間の平均）
- 4 予察情報の種類
病害虫防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。
 - （1）予報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
 - （2）注意報・・・主要な病害虫の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
 - （3）警報・・・主要な病害虫の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
 - （4）特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病害虫がある時や、病害虫の発生様相が特異な時に発表する。
 - （5）防除情報・・・注意をうながす必要がある病害虫の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

お知らせ (<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>)

病害虫防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。予察情報の根拠となる地域別調査データ、防除対策等を掲載しています。ぜひご利用ください。

【文書取扱】

病害虫防除・肥料検査センター 生頼
TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499
E-mail:byogaichu-hiryo@pref.miyazaki.lg.jp